

令和4年度学校自己評価

中長期ビジョン (学校ビジョン)	「地域産業及び社会の発展に貢献できる人材の育成」 ～一人一人の生徒を大切にしたい教育の実践～	本年度 重点目標	1 専門教育の充実	(1) 質の高い専門教育の実践 (2) 資格取得の推進
			2 学力向上	(1) 基礎学力の定着 (2) 授業力の向上 (3) ICT等を活用した教育の実践
			3 キャリア教育の推進	(1) 進路指導の充実 (2) 職業観・勤労観の育成
			4 こころの教育の充実	(1) 規範意識の醸成 (2) 自己理解・他者理解に基づいたよりよい人間関係の構築 (3) 自己肯定感の育成
			5 地域連携の充実	(1) 地域の教育資源の活用 (2) 科の特色を生かした地域連携の推進
			6 情報発信の充実	(1) 学校ホームページ、体験入学、中学校説明会などにおける本校の魅力の発信 (2) 広報活動の充実

年度当初			中間評価 (10) 月			最終評価 (3) 月					
評価項目	評価の具体項目	現 状	目 標 (年度末の目指す姿)	目 標 達 成 の た め の 方 策	経 過 ・ 達 成 状 況	評 価	改 善 方 策	経 過 ・ 達 成 状 況	評 価	改 善 方 策	
1	専門教育の充実 (1) 質の高い専門教育の実践 (2) 資格取得の推進	○スーパー農林水産業士の認定者数は、R2年度は1名であったが、R3年度2名となった。 ○実習は少人数で丁寧に指導を行っているが、とすれば教員が先回りしすぎて生徒の主体的活動を阻害している。 ○資格取得に対して、意欲的な生徒と無関心な生徒の二極化が見られる。	○地域産業との連携を有効活用し「スーパー農林水産業士制度」・「アグリマイスター制度」などの高度な知識と技術とを必要とする専門性の高い制度を生かした、進学・就職ができる。 ○生徒自らが目標を設定し、その目標に向かって主体的に学習に取り組んでいる。 ○生徒は卒業までに社会で即戦力となる資格を1つ以上取得している。	○毎日の授業の中で、地域の産業や教育機関との連携を深め、また社会人講師等を積極的に活用し、高度な技術を教わり習得する。 ○職員は個々の生徒の特長の理解を共有し、連携を図り指導を行う。 ○授業で基礎基本を学習した上で、資格取得に臨む指導を行う。	○「スーパー農林水産士」取得を目指し、2年5名、3年1名が取り組んでいる。 ○資格試験は、新型コロナウイルス感染症の影響により受験機会がなくなったものがあつた。	B	○「アグリマイスター制度」等の取得に向けて、2学期以降も引き続き指導を行う。	○継続的に地域の産業界や教育機関との連携を実施し生徒の進路実現に生かすことができた。 (アグリマイスターR3:1名R4:0名 スーパー農林水産業士R3:2名R4:1名) ○令和4年度3年生全員が卒業までに社会で即戦力となる資格を1つ以上取得した。 また、生徒が積極的に資格取得にチャレンジし合格率が向上した。 (合格率R3年度56%→R4年度68%)	B	○基礎基本を根気強く丁寧に指導する事を再度確認する。 ○地域産業との連携を更に図り、生徒の興味関心の向上に取り組む。 ○授業と資格取得を関連付け、自らの学習目標が明確となるよう指導方法の改善を図る。	
2	学力向上 (1) 基礎学力の定着 (2) 授業力の向上 (3) ICT等を活用した教育の実践	○生徒の基礎学力向上につながる手立てを検討し、実践に向けて取り組もうとしている。 ○「よりわかりやすい授業」の実現に向け、教材の可視化、実物提示、観察実験を取り入れる工夫がされている。 ○授業や教室環境のユニバーサルデザイン化が進められている。 ○ICTタブレットの更新、活用環境の改善を行ったことで活用頻度が増加している。	○成功体験の積み重ねや学びあいのある授業、ICTを活用した授業、授業のユニバーサルデザイン化などの取組が組織的に行われており、生徒の基礎学力向上につながっている。 ○生徒の授業アンケートの「専門科目の学習に意欲的に取り組んでいる」の項目が90%以上、「授業をとおして基礎学力が身につけている」の項目が80%以上になっている。 ○GIGAスクールの本格的な導入により、教職員によるタブレット端末の活用環境が整い、ICT機器を活用した教員の授業力が高まっている。	○授業のユニバーサルデザイン化について、教職員の共通理解を図る。 ○学習意欲を高め、わかりやすい授業の展開を促すためのICT機器の活用方法を研究する。 ○生徒各自の特性や対人関係に配慮して、生徒の実状に即した学習方法を模索し、授業改革を進める。 ○授業タブレットを活用した授業研究会、授業実践報告会や各種研修会への参加をとおして、教員相互の授業力向上を図る。	○授業改革に向けた研修等は実施できていない。 ○生徒の授業アンケート(1学期末)では、「専門科目の学習に意欲的に取り組んでいる」が93%、「授業をとおして基礎学力が身につけている」が78%である。	C	○授業改革に向けた研修やICT機器使用の講習会を2、3学期に実施する。 ○学習指導委員会を持って授業研鑽の方策を練る。 ○教職員向けアンケートを実施し状況把握する。	○生徒の特性や実状に即した丁寧な学習を展開したが、更なる授業改革に向けた研修等が実施できていない。 ○生徒の授業アンケートでは、「専門科目の学習に意欲的に取り組んでいる」が96%、「授業をとおして基礎学力が身につけている」が83%である。 ○教職員向けアンケートを実施し、授業での積極的な活用が見られた。	C	○授業改革に向けた研修を行う。 ○学習指導委員会を計画的に開催し授業研鑽の方策を練る。 ○教職員向けアンケートを実施し状況把握する。	
3	キャリア教育の推進 (1) 進路指導の充実 (2) 職業観・勤労観の育成	○勤労意欲は高いが、継続的な学習に取り組めず、基礎学力の向上が求められる生徒がみられる。 ○本校の教育内容と関連した企業への就職や学校への進学が年々増えている。 ○インターンシップにおいても科の学習内容と関連した企業を選択する生徒が増えてきている。	○専門的な技術を習得して、地域の担い手として地域社会に貢献しようとする意識を持っている。 ○上級学校への進学を目指し、意欲的に専門的な資質・能力を習得し、将来の地域を担うリーダー的存在を輩出している。 ○本校の教育内容と関連した企業等への就職者及び専門性を活かした進学者の割合が40%を超える。	○キャリア教育の年間計画に従い、生徒個々のキャリア発達を促す。 ○インターンシップ、上級学校の見学研修および社会人を活用した事業等とおして、職業観の育成や社会性の向上を図る。 ○適切な進路情報を発信することで、生徒の意識を高める。	○校内企業説明会、進学説明会は3年生に加えて1・2年生の参加も見られ有意義であった。インターンシップ、上級学校見学会、進路セミナーは今後開催予定。 ○就職試験等を通して基礎学力向上の取組が必要だと感じる。 ○校外模試やSPI試験、進路テストなどを実施し、進路意識の高揚に努めている。	B	○学校全体で、基礎学力や一般常識の向上について、体系的に取り組むことを検討する。 ○インターンシップ、キャリア関係の講演会等を通して勤労観や社会性の習得につながった。 ○校内企業・進学説明会への参加者は、延べ137名で1・2年生の参加は進路を考える良いきっかけとなった。 ○本校の教育内容と関連した企業等への就職者及び専門性を活かした進学者の割合が56%であった。(R3年度46%)	A	○1年時から進路意識を高める取組を探る。(進路面接の実施、基礎学力の向上)		
4	こころの教育の充実 (1) 規範意識の醸成 (2) よりよい人間関係の構築 (3) 自己肯定感の育成	○特別指導の対象となる事案は減少しているが、自己理解・他者理解に基づく人間関係を構築する力が十分育成されていない生徒間の事案がある。 ○学校生活全体で人権教育に取り組んでいるが、相手に対する思いやりの欠ける言動がみられることがある。 ○毎日の授業に規則正しく出席することができず、欠席等を重ねてしまう生徒が少なからずいる。 ○生徒会執行部員はまじめに活動しているが、指示待ちの傾向があり、主体的に活動するまでには至っていない。	○基本的な生活習慣が身につけ、落ち着いた学校生活を送るとともに授業規律が確立されている。 ○校則を遵守するとともに、端正な服装・頭髪、日頃のあいさつなど自ら心がけ行動できる。 ○生徒一人一人の人権意識が向上し、現在よりも相手に思いやりをもった行動ができるようになる。 ○生徒一人一人が、居心地の良いクラスの中で、落ち着いて授業に取り組んでいる。 ○Hyper-QU結果の学級満足群に入る生徒の割合が、40%を超えている。 ○通級指導教室が、スムーズに運営されている。 ○学校行事・生徒会活動・農業クラブ活動・家庭クラブ活動を主体的に企画・運営することでリーダーシップを養い、学校を活性化させる。	○毎朝、生徒登校時に職員が服装指導及び挨拶指導を行う。また、PTA及び生徒会によるマナーアップの取り組みや挨拶運動を実施する。 ○コミュニケーション能力の涵養とともに日々の学校生活の指導をとおして生徒の規範意識を醸成していくよう努める。 ○授業や集会での授業規律・集団規律を徹底する。 ○学校生活全体での取組を充実させ、人権意識の向上をはかる。 ○担任、関係職員と保護者、SC、SSW、外部機関との連携を密にして生徒の支援にあたる。 ○学校行事・部活動や農業クラブ・家庭クラブ活動、委員会活動を通して、自主性・積極性・協調性を身につけ、自己肯定感へつなげる。	○規範意識が十分に醸成されていない生徒が指導を繰り返して受ける事案がある。 ○他人を思いやる力が醸成されていない生徒の言動により、生徒間で良好な関係が構築されていないため発生する事案がある。 ○人権LHRおよび事前事後学習会、人権委員会実施により人権意識向上に取り組んだ。状況に応じて生徒の個別指導を行った。 ○保護者や外部機関と連携して細やかな指導にあたる。 ○2学期にある農林祭、農業クラブ全国大会に向けて準備をしっかりとし、成功させるよう計画的に進める。	○生徒の些細な変容を見逃さず、職員間で情報を共有し、組織的かつ継続的に見守りや指導を行い規範意識や他人を思いやる力を涵養していく。 ○保護者や外部機関と連携して細やかな指導にあたる。 ○2学期にある農林祭、農業クラブ全国大会に向けて準備をしっかりとし、成功させるよう計画的に進める。	C	○生徒の些細な変容を見逃さず、職員間で情報を共有し、組織的かつ継続的に見守りや指導を行い規範意識や他人を思いやる力を涵養していく。 ○保護者や外部機関と連携して細やかな指導にあたる。 ○2学期にある農林祭、農業クラブ全国大会に向けて準備をしっかりとし、成功させるよう計画的に進める。	○規範意識や他人を思いやる力が十分に醸成されていない生徒の言動による問題行動に対して、職員間で情報を共有しながら粘り強く指導を繰り返した。 ○人権LHRおよび事前事後学習会、人権委員会実施により人権意識向上に取り組んだ。状況に応じて生徒の個別指導を行った。 ○Hyper-QU結果から適時、面談を実施した。生徒・保護者面談の情報共有を密にするため情報交換会(週1回)を行った。(学級満足群に入る生徒の割合52.6%) ○農林祭・即売会等生徒職員とも一人何役も担い、充実した行事となった。また、生徒会執行部のリーダーシップが発揮された。農業クラブ全国大会に出場する生徒が増えた。	B	○生徒の問題行動に対しては、その背景や心情など生徒理解に努めながら、毅然とした態度で指導する必要がある。 ○重大問題に対しては、外部機関と連携しながら指導していく必要がある。 ○Hyper-QUについては、昨年と比較しての研修会を行い活用・改善する。 ○学校行事毎の目標や分担の明確化を図り、生徒自らが行動できるようにする。農業クラブ全国大会の入賞を目指す。
5	地域連携の充実 (1) 地域の教育資源の活用 (2) 地域連携の推進	○ちのりんショップ・地元の保育所との菜園活動や、福祉施設での実習など、地域交流の場ができており、様々な人との関わりを学ぶことができています。 ○地域連携活動を発信して本校の特色や魅力をPRしている。 ○地域産業の「藍染」や「造園」等、地元職人と連携した活動を行っている。	○地域連携事業の活用により、地域の方との交流をとおしてコミュニケーション能力や表現力が向上している。 ○生徒や教職員の専門的知識や技術力を地域に発信している。 ○地域に積極的に関わることができる。 ○地域連携の取組が浸透し評価され、地域アンケートの各取組について「良い活動」と「まあまあ良い活動」と回答している割合と「地域の活性化に役立っている」と思っていますかの項目が90%以上になっている。	○地域の保育園・高齢者福祉施設との園芸交流、藍染交流、ちのりんショップの取組をさらに推進する。 ○地域住民と関わる機会を増やし、主体的な活動の場を設ける。 ○「地域基礎」の一層の充実を図る。	○「ちのりんショップ」はふるさと創造科の学習の柱となり安定し充実した運営ができています。 ○藍染めや造園業者との連携を行うことができた。 ○園児・高齢者施設との園芸交流を継続することができた。準備から当日まで一連の作業を通して相手への思いやりを持って行うことができた。 ○「地域基礎」の学習の目的を理解し、フィールドワークやスライド作成に意欲的に取り組めた。また、地域に出かけ地域の方々とふれあうことができた。	B	○学習のねらいについて考え理解させる時間を確保しつつ、ねらいに沿った学習の充実を図る。 ○地域に赴き、見学や交流を実施する前に基礎知識を習得させ、より有意義なフィールドワークとなるようにする。	○各種地域連携事業の推進により、地域の方との交流を重ねることに生徒の確かな成長が見られた。 ○県農業クラブプロジェクト発表会最優秀賞や県地域研究発表会入賞等、日々の地域との交流が情報発信に繋がっている。 ○コロナ禍で交流が制限される中、地元保育園や高齢者施設との交流は軌道に乗ってきている。 ○地域アンケートでは、回答者全員が地域連携全ての取組について「良い活動」か「まあまあ良い活動」と回答しており、「本校の地域連携の取組は地域の活性化に役立っていますか」の項目についても回答者全員が肯定的な意見であった。	B	○学習のねらいについて考え理解させる時間を確保しつつ、ねらいに沿った学習の充実を図る。 ○担当者、管理職を交えた関係者間の連携や、事業の実施目的などの再確認・情報共有の場を設定し更なる充実を図る。	
6	情報発信の充実 (1) 本校の魅力発信 (2) 広報活動の充実	○生徒会行事や部活動の大会等の情報発信が時機を逸している状況がある。 ○本校の学習内容に対する、中学生やその保護者の興味・関心・理解が少ない。 ○学校ホームページの更新が不十分である。	○生徒や教職員の専門的知識や技術力を地域に発信している。 ○生徒会活動や部活動大会報告をこまめに学校HPに掲載するとともに、生徒自らが情報発信できるようにする。 ○中学生やその保護者の本校学習内容や魅力を理解し興味・関心が高まり、志願者数が増加している。 ○学校ホームページの更新を随時行い、閲覧数を増やす。	○学校紹介動画を作成し、本校の魅力をさらに発信する。 ○地域(智頭町)と連携し、生徒が自主的に情報発信できるようにする。 ○地域(行政)と連携し、生徒が活動する場面を増やす。 ○学校ホームページの更新手順を見直し、迅速な情報提供を行う。	○学校説明会で学校紹介動画を使い、中学生やその保護者に本校の様子を伝えた。 ○智頭町の高校生ライターとして町のホームページに掲載した。継続性に欠けた。 ○学校ホームページの閲覧数は、R4年9月～R5年1月の5か月間で11,561件だった。	B	○学校ホームページの更新手順を簡略化することで更新回数をさらに増加させる。 ○高校生ライターの記事掲載の頻度を増やし、学校行事やほ場の様子などを発信する。	○学校紹介動画作成・学校行事等のホームページによる配信に努めた。地域アンケートに「ホームページが見やすく、リニューアルされたのが良かった」とのご意見を頂いた。 ○智頭町の高校生ライターとして記事を町のホームページに掲載したが、継続性に欠けた。 ○学校ホームページの閲覧数は、R4年9月～R5年1月の5か月間で11,561件だった。	B	○生徒会執行部全員が高校生ライターの研修を受け、記事を作成する。	
7	学校業務の改善 (1) 長時間勤務者の解消 (2) 業務の効率化	○時間外業務が、年360時間を超える職員はいなかったが、数名の職員で45時間を超える月があった。 ○グループ制の課題が明確になる中、抜本的な見直し(新分掌の編成など)を検討し、本年度分掌制をスタートした。	○時間外業務が、月45時間、年360時間を超える教職員が少ない。 ○分掌制の効果と問題点を検証し改善を図り、業務の継続性と効率化を進める。	○時間外業務の時間が多い職員へ、個別に縮減を呼びかける。 ○各分掌部長と定期的に情報交換を行い、学校課題の改善に繋げていく。	○時間外勤務が多い教職員に対して面談を行うことで改善が見られている。 ○分掌制導入による成果と課題について情報共有に努めている。	B	○時間外業務時間の多い職員への縮減呼びかけと、職員間の綿密な情報共有を継続する。 ○こまめに分掌部長との情報交換を行い、課題の改善に引き続き取り組む。	○時間外業務が、月45時間、年360時間を超える教職員が今年度も無かった。月あたり時間外業務の平均値は、ほとんどの月で減少した。 ○分掌主任とのこまめな情報共有を行い課題解決に努めた。	B	○業務の偏りが無い校務分掌の人員配置を考えていく。 ○情報共有を、行内課題解決しながら、校務分掌のより良い体制を構築していく。	